

<巡検報告>(4) 銚子鹿島方面踏査記

今朝洞, 重美

(出版者 / Publisher)

法政大学地理学研究室

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政地理

(巻 / Volume)

1

(開始ページ / Start Page)

37

(終了ページ / End Page)

38

(発行年 / Year)

1950-07-01

が引かれ、地図の作成課程を理解して行く。南方の上野原町を伯耆段丘面が一目に見渡せ、西方の教段にわたる段丘、北面方の桂川断層（逆断層）が特に我々の目にとまった。丘を降り羽佐岡、新井、鶴川の部落を通る、漂穂貞、磯部侵蝕、侵蝕復活を途中で見る。湯をおぼえ農家に水を求めるが井戸が遠いらしく時間がかかる。水の不便なことを自ら体験し段丘上の生活の苦勞がうかがえた。旧街道と新道の比較対照の出来る所があり、廃道となった旧街道に面した部落のさびれかたも思ったよりはげしかった。しかし通信線などは未だ旧道に沿っている様であった。段丘、水利状況、発露所を見ながら新田倉、八沢、上新田を通り駅に到達す。实地に御指導を願いた犬久保先生に感謝しつゝ、飯路につく。

④ 銚子鹿島方面踏査記

今朝 洞 重美

十二月五日、思い出した程に寒いころの時雨を衝いて琴田先生御指導の下に銚子半島より鹿島砂丘に到る巡検を行った。総勢十九名、内紅二貞を加う。予め御聞きたる予備知識にて市川奥地砂崖の成因を考へつゝ、乗金に出る。従来單に砂丘列と考へられていた九十九里浜は海底にあつた凸凹地形がそのまゝ隆起したものであると云う説論は興味を抱いた。更に寛文年間迄湖であつたと云う稻海干拓地や奥地砂丘の上に乗る八日市場の景観を車窓より観察しつゝ銚子灣。電車に乗換えて犬吠崎迄直行した。燈台のある対置海岸の上にて詳細に銚子半島地形発達史の御講義を受ける。此処は関東地方で最も古い二疊紀から白堊紀、第三紀、洪積紀の諸岩石の層序関係がよく見られる所で、日頃教室で整合、不整合と疊の上の水線をやつて居たのが、漸く身にマハて来た。それから遼遠として最も早く開けた外川を経て犬若に到り見事な波蝕崖をなす巖風津を眺めつゝ此の半島が全体として海蝕台地なる事及尤般桑野で見られた風隙を思い浮べつゝ被載頭河に見られるウィンドギャップの成因を御聞きたる更に現在は海中の小岩にすぎぬ芦笏島が昔は陸続きであつた事に海蝕の層大さを感じて太平洋を望みながら晝食。午後にははるかに眺めた風隙の中を觀察しつゝ海蝕崖の上を通つて名洗に出る。途中崖の上で珍らしい侵蝕砂丘を見た事は意外であつた。そこから隆起前後の流路の変化に就いて興味ある御説明を聞き乍ら井岡氏の所謂泥炭層なるものを見、昔

此類を濕地化したと思われる河口の砂嘴らしきものを越えて銚子港に出る。有名な魚市場では休日のため前悪しく獲物の入荷状況を見る事が出来なかつたが、山と覆まれた魚箱が凡そ一日で消化されるという話で大体の活気は甚衰する事が出来た。それより大利根の河口を渡り波崎の町に出、有名な鹿島の大砂丘を見る事が出来た。全く日本びなれしたあたかも砂漠の中に立てる如き感を与える雄大さに一同一驚したが毎耳砂丘は削られて行くと言う事でその砂止めの柵が作られて居た。その原因は未だ不明との事である。此の砂丘の砂は下の丘越そのものから供給されるのだと云う。それより新鮮なる魚を手土産に海の如き河口を銚子に戻り、有難義に才ぞした一日を先任に感謝して解散した。

5 登呂遺跡・久能山地方巡検記 広川 裕子

かねて福山殿殺の譚義や、早田殿殺の御指承等に依り計画中であつた静岡地方への巡検が十二月二十五日から二十六日にかけて行われた。参加者は十一名、二十五日の最終列車で東京駅を発車。二十六日午前四時過ぎ未だ暗いとばかりに包まれた静岡駅に到着。五時、冷い星空の下に、地図と懐中電燈を頼りに出発。八幡山附近を通過して登呂遺跡に着いたのはやつと白みかけた頃であつた。粘土層によつて埋没されていつた登呂の弥生式文化期に於ける水田聚落住居の残骸、埋没の原因として、安倍川に依る静岡平野形成過程に於ける自然堤防説や、地盤変動説、地殻隆起説などがあるが、短時間では之等についてあまり調べる事が出来なかつた。

然し安倍川の乱流による自然堤防の形成や後背湿地の粘土層による埋没、それは又地盤の変動と相俟つて促進されたのではなからうか。

住居跡中であつた木材、水田遺構の柵板等を見学して後、畔道沿ひに高松砂丘に向う。途中土地利用、特に茶畑について狭山丘陵附近のそれと比べて論じ乍ら久能街道に出る。大奇川橋附近で砂丘のカッティングに依り砂礫の地層を調べ、更に中平松の典型的な天井川を通過する頃になると、久能山麓の有名な石垣苺の栽培景観が展開されて来た。経営者をつかまえての話によると、この石垣苺は商品作物として市場価値が高いだけにその栽培には苦心を要すると云うことがわかつた。十時過ぎ久能山登山口に到着。十一時半頃日本平を目指して出発した。今迄街道を歩